

東京は広く深い。飲まれたら最後、自分の居場所すら、相手の居場所すらわからなくなるほどに、五感を奪われてしまう。雨が降れば滴も飲まれ、まどろっこしい湿気は地下鉄へと続く下り階段へとなだれ込む。東京の地下は雨の息を醸造する。電車は通過するたびにそれを掻き混ぜる。

下り電車のある車両には、下村の他には誰もいない。時刻は夜の十一時を過ぎ、他にも帰宅する者がいそうな気配ではあるが、下村の他には誰もいなかった。彼は腰掛けの端に頭を預けて座り、向かい側の腰掛けを見つめていた。そこにあつたのは薄手のハンカチである。紺の地に緑線の横模様、赤線の縦模様が施されている。下村の意識はハンカチにほだされている。下村を見る者は誰もいない。ビニール傘の先は水が溜まり、揺られながらあらぬ方向へ伸びていた。アナウンスが駅の到着が近いことを伝える。下村はハンカチを無心で見つめる。やがて車両は失速し、失速し、失速し、満を持して停車する。大げさな音を立てて扉が片方開く。下村は立ち上がり、ハンカチを手に取り、傘をもう片手に車両を出た。

改札を出た先にいた駅員にハンカチを渡した。

「落とし物です。車内にありました。さっき着いた電車の」

「おや、わざわざありがとうございます」駅員の礼に会釈を返してから下村は地上へと続く階段に向かった。一日中降っていた雨は未だ止んでいなかった。下村はビニール傘を開き家へと向かった。

二

明くる日の下る車両、下村は何もない通路を挟んでメガネのケースと対峙していた。車両には誰もいなかった。下村は無心でメガネケースを見つめる。駅に着き扉が開くとケースを取り車両を降りた。

駅員はホームの端にいた。昨日と同じ駅員だった。彼は笑顔で応じた。

「ご協力ありがとうございます」

「いえ、お構いなく」階段を昇ると雨は止んでいた。傘は手持ち無沙汰になってしまった。数歩歩くたびに傘で地面を突き突き、帰路を進んでいた。街は雨に洗われたように静かだった。街頭だけを頼りに進んでいた。

そこで突然下村は呼び止められた。地獄の窯が二度開いたような声が彼を止めた。

「おい……そのガキ……その傘を俺に売る気はないか……？」声の主は何もない濡れたアスファルトに尻を座している老人だった。老人は体中の毛という毛を無造作に灰色く伸ばし、服はくたびれ異臭を放っていた。下村は不審に思いながらも応じた。

「はア……この傘をですか？あいにく、これしか傘を持ってないんです。すみません」

「そんなこと言わずにさ……ほら、雨止んでんだろ？その傘は用済みだろ？俺にくれてやってもいいじゃないか……。新しい、良いやつを代わりに買えばいいのさ……。売ってくれ

ってんだ……。別にタダでくれってんじゃないぜ……。これはどうだ……。」老人は衣服に手を突っ込み、奥まで手を伸ばし、よれた紙幣を取り出した。下村が見たのは五千円札一枚である。下村の警戒心が俄然強まった。

「急いでいるので、失礼します。これは渡せないです」足早に老人の元を去った。老人は後ろから罵声をつぶやき続けていた。

次の日にはキーホルダーが車両の片隅に転がっているのを見つけた。クマのキーホルダーだった。下村はそれを手に取り、駅に着くと駅員に渡した。いつもの駅員だった。

「あなたのおかげで助かっています」と言われたが、下村には心当たりがなかった。

「何がですか？」

「あなたに拾われて、きつと物もよろこんでいますよ。そのままだったら流れ流れて汚れていくだけです。親切心が何かを救っているんですよ」

「まあ、たかが拾って届けているだけですがね」

「それに、何かを持っているんじゃないやありませんか」

「持っているって何をですか？」

「落としたものに出会う運というか……。好かれているんです。何日も連続で落とし物を届けてくれる人なんて見たことがありませんよ」確かにそれもそうだと思った。下村は落とし物を見つれることが人並みより多い。届けることも下村にとっての普通だった。そんなことを考えていると、また昨日と同じ老人に呼び止められた。

「今日のはあの傘はないのか……。ないのなら仕方がない……。その時計はどうだ……。それなら昨日の十倍、いや、それ以上出すね……。」下村は再び立ち止まった。老人は全く同じ場所にいた。

「なんでそれほどまで欲しがるんですか？ ビニール傘なんて五百円もあれば買えるでしょう。この腕時計だって買おうと思えばいつでも買える。だってあなた、お金は持っているんですよ？」そう言うとき老人は舌を鳴らして否定した。

「ガキにはわからないだろうさ……。俺は傘が欲しいんじゃないやなくてな、その傘を、その時計を売ってくれと言ってるんだ……。わからんだろうな……。イヤ……。はたして……。いつかわかるかもしれない……。お前は……。」老人は気味の悪い笑顔を浮かべた。

「もう話しかけないでくれよ」下村はそう吐き捨ててから帰った。

三

次の日の下村は少し様子が違った。大事にしていた万年筆を失くしたのだ。昼にポケットにないことに気づき、焦った。祖父からもらった高価な代物だったのである。昼休みに行った店に尋ね、会社の中も探し、心当たりのある場所を探したが、どこにもなかった。仕方なくあきらめ、電車に乗った時刻はいつもより早かった。

人が溢れている車両に座れる席があるはずもなく、いつもの定位置のすぐ近くに立ち窓の外を眺めることにした。窓の外には川が流れ、暗く街灯が立ち並ぶ、広く物悲しい光景だった。河原の茂みにいくつものブルーシートで作られた家が見えた。窓が濡れ、雨が降り始

めたことを知る。すぐに河川敷は見えなくなり、車両はトンネルに入った。窓は電車内を映し始めた。ひどく暗い顔をしている下村と、詰め込まれている人々。その中の一人の胸ポケットに、万年筆が差し込まれているのを下村は気づいた。万年筆にはイニシャルが刻まれている。

「H.S」下村のイニシャルだった。下村の落とした万年筆と全く同じ種類だった。見れば見るほど、それは間違いなく下村が落とした万年筆だった。さっとその男に顔を向け、肩をつかんだ。

「すみません、その万年筆を見せてもらえませんか」振り向いた男は下村と年の離れていない、知性を感じさせる顔立ちの、銀の縁のメガネをかけた男だった。男は戸惑うでもなく、快諾するでもなく、静かに視線をよこした。

「何故です？」不思議なことに、周囲の人間は誰も二人を気にせずに各々の作業に没頭していた。

「今朝方か、午前かに万年筆を落としたんです。探したんですが見つからなくて、もしかすると私の物かもしれません。その万年筆、拾ったんですか？それとも、あなたのものですか？どこかで拾ったんですか？」下村は焦りを自覚していたが、聞かずにはいられなかった。「これはあなたのものなんですか？確かに拾い物ですが」男は背広から万年筆を取り出して見せた。

「はいそうなんです。イニシャルも同じだし、間違いなく私のものです」

「いや、それはないな」男はまっすぐ下村の目を見ながら断言した。下村は回答の意図がわからずに一瞬硬直した。

「どういうことですか？」

「この万年筆は、私に拾ってもらいたがっていました」

「すみません、言ってる意味がわかりません」

「あなたは皆に良い顔を振りまいていませんか？であればわからないのも当然ですね。あなたが拾った落とし物は、あなたに拾われたがっていたんですよ。けれどあなたはそれらを手放す。これは、どうにも、いけませんね」男はそっと万年筆を胸ポケットに戻した。車両には電車が風を裂く音と、男と下村の会話だけが響いていた。しかしそれを気にする者はだれ一人としていなかった。男は続けた。

「好意に対して行為を真摯に返さなければいけないんですよ。それは、自分が求める時に、肝心な時に、見放されてしまう所以です。全てのものに平等に親切にするから、あなたは見限られるんですよ。平等は裏切りの可能性を常に伴っている」アナウンスが駅の到着がまもなくであることを知らせていた。下村の心臓の動機が早くなっていた。人々はもぞもぞと動き、下車の支度を始めた。

「愛を無下にすると、見向きもされなくなりますよ。もう二度とまともな恋ができなくなるよ、くれぐれも注意したほうがいいでしょう」息を吐いて扉が開いた。男は人の波に紛れ込んだ。下村は後を追おうとするが人の波に乗り遅れ、電車を降りた時にはもう男の姿を見失

っていた。ホームで立ち尽くす下村を背に、扉が閉まり電車は行ってしまった。

最寄り駅を降りて昇り階段、地上へ出るとかさをさしていつもより遅いペースで下村は歩いた。衣服に空いてる手をつっこみ、うつむきがちに考え事をしながら歩いていると、またもや老人が声をかけてきた。

「オウ、小僧、売る気になったか……良い傘持ってるな……え？」相変わらず不快な笑顔を老人は浮かべていた。

「お前に売る物なんてないよ」そう言って立ち去ろうとした。

「なんだア……？女にでもふられたのか……？」下村は立ち止まる。

「ハハハ……わかりやすいやつだ……気にすることはない……マア……一回どうだ、人の女でも盗ってみたらどうだ……気晴らしによ……俺は責任はとらんが……な……」下村は思わず振り返って老人を睨みながら去っていった。

四

次の日、車両には下村を見る者は誰もいない。下村の向かい側には本屋の袋があった。親書サイズのふくらみが見える、下村は無心でそれを見つめていた。車両には下村以外には誰もいない。何者にも見られていない。息を吐いて扉が開く時、下村の顔に影が射した。立ち上がり、本屋の袋を取って車両を降りた。下村は自分の脈動をはっきりと感じ取っていた。

改札の先にいつもの駅員がいた。気にしない素振りで改札を通った。

「今日はなかったんですね」駅員が声をかけ、下村が不審げに振り返った。

「え？」

「昨日もなかったですね。落とし物」駅員はにこやかな表情で話した。

「ああ、そういえばそうですね」

「それは？」駅員が本屋の袋を指さした。

「ああ、買ったんです」恐ろしいほどに自然な笑顔で答えた。

その日は老人のいる道を避けた。家までの道中、下村は何べんも何べんも後ろを振り返りながら、足早に歩いた。

それから毎日、下村は落とし物を盗んだ。家には落とし物が増えていった。一か月も続けると、計り知れない量になった。エコバッグ、折り畳み傘、ポーチ、おもちゃ、書類……。家の片隅に落とし物を集め、何をするでもなくただ盗り集め続けた。使えるような物があれば、それを私物のように外に持ち出して使うようになった。人々は何も知らずに、下村の持っている物を、下村の物として認識し、何も気づかずに過ごしているのだ。それが下村にはたまらなく心地良かった。これは俺のものだと、自分が勝ち得たものだと理解した。誰にも盗られない、物が俺を選んだ、俺の物なのだ。

下村は物を盗むようになってから老人を避けるようになっていたが、土曜日のある日、珍しく下村から老人の元へ訪れた。それなりに人通りがあるものの、老人は全く気にせず日中からブルーシートを巻いて道端で眠りこけていた。下村はビニール傘で老人の肩を突つき起こした。老人が顔を上げると、すぐに下村に異変があったことを感じ取った。一見何

も変わらないようにも見えるが、身体から余裕のある姿勢がにじみ出ていた。これにはさすがの老人もいささか警戒をしたが、寝ぼけ眼をこすり、すぐに平常心に戻った。

「お前、俺を起こすんじゃない偉くなったもんだな……え？」

「傘をやるよ」不意に言われ老人は虚を突かれた。

「欲しがってたる？ほら、あの時のビニール傘だ」下村は傘を差し出し、老人は受け取った。老人は品定めするようにしてぐっと顔を近づけ、目を凝らした。確かにあの時の傘だった。そのまま上目を使い老人は下村を見た。やはり何かが確実に変わっているのだ。

「……良からうさ……示した額はきっちり払ってやるよ……」老人はポケットに手を入れ探したが、下村はそれを制止した。

「金は要らない。お前にくれてやるよ」静かににらみ合ったが、やがて老人のほう折れて傘を自らの後ろに置いた。

「……かまわないが、お前は後悔することになるぞ、俺に売らなかったことをな……何があったかは知らんが」下村は乾いた笑いで返した。

次の日も盗みを働いた。いつもの仕事帰りの電車、例のごとく紙袋を拾った。菓子が入っていた。贈り物のような包装がされていた。車両には誰もいなかった。下村以外には誰も扉が開くと車両を降り、改札に出た。そこで下村は声をかけられた。いつもの駅員と、女性が一人いた。

「それ、なんですか？」

「僕のも物です。お見舞い用に買ったんです」平然と嘘をぬかした。下村にはもはや罪悪感などない。

「実はですね、この方が落とし物を探しておりまして。乗っていたはずの電車が折り返してきたので、あるかと思って」サツと下村の体温が引き、動悸を感じた。しかし表の表情は眉一つ動くことなく、冷静に返した。

「何をお探しなんですか？」

「菓子折りです。それと同じ」女性は紙袋を指さした。

「そうなんです。あいにくですが、これは俺の物なので、失礼します」下村は踵を返して会談へ向かった。背中二人の視線を感じたが、それを無視して歩き続けた。

階段を昇ることを考えていた。階段さえ昇ってしまえば、地上にさえ出れば、俺は夜に紛れて消えてしまう。誰にも捕まえられるまい。階段の一段目に足をかけた。誰も止めない。そして次の一步、次の一步と昇って行った。一步が重く長い。上に見える夜闇に焦がれ、平静を装って昇り続けた。地上まであと三段、二段、一段、のところで呼び止められた。

「待ってください」駅員の声と、二つの足音が聞こえた。下村が振り返ると、平坦なまなざしで二人が見つめていた。

「申し訳ないのですが、中を確認させてもらっていいですか？」駅員が言う。

「何故？」下村は言う。

「メッセージカードが入っているんです。それを見れば、誰の物かわかる」女性は言う。沈

黙が挟まる。

無言で下村は紙袋を差し出した。駅員は下村の目を見ながらそれを受け取った。右手を袋に入れて中を探った。下村は無心で紙袋を見つめた。それから駅員が言った。

「カードのようなものは入っていませんね」沈黙が挟まる。下村は平静を貫いた。

「用が済んだら返してください」駅員は紙袋を手渡した。

「あらぬ疑いをおかけして申し訳ございません」下村はひたたくるように受け取ると、すぐにその場を去ろうとした。が、

「待ってください」今度は女性に止められた。

「それは誰に渡すものなんです？」

「明日、入院していた友人に渡すんです」

「私はそれを渡せずじまいで、自分で持って帰ってきたんです。だからそれは、賞味期限が切れているはずです。確認させてください」二人の視線が混ざり、沈黙になる。無言で下村は袋を差し出したが、もう片方の、ポケットに入れた手は震えていた。女性は箱を取り出し、包装を剥がした。賞味期限の記載を見つけ、下村に見せた。

「××××06.14」二週間前の日付だった。下村は軽い笑い声を出し、それから、その場を歩き去った。二人の視線は角を曲がるまで彼を刺し続けた。

家までの道中で震えが止まらなくなり、近くの公園に寄って水道で吐いた。ポケットに入っていたメッソージカードを丸めて茂みに投げ捨てた。壊れていく感覚がしたが、震えで何が壊れたのかわからずに、身体のあちこちを触って確かめたが、その身体がそこにあることしかわからなかった。それから自分が拾った落とし物の一つ一つのことを思い馳せ考えた。風呂に入っても、布団にもぐっても震えは止まらなかった。

五

異変が起こり始めたのはそれからだった。下村は落とし物をするようになった。物をなくすようになった。一日のうちに何か一つ、一つずつなくなっていくのだ。どこかで物を落とし、ある時は部屋から物がなくなり、いつからか下村は落とし物を拾わなくなった。最寄り駅は使わなくなった。その様子を老人に笑われた。

「お前、ずいぶんとカンロクがなくなったなア……わらいもんだな……どうしたのかね？へマヤらかしたのか……？ハハハ……いやはや……なんともブザマだなア……」と笑われるたびに下村は老人に唾を吐き捨てた。ポケットに手を入れているが、その手は震えているのだ。内心はみじめに怯えきって震えているのだ。

何が下村は恐ろしいのかと言うと、自分が見放されていくことだった。落とし物だけではなかった。自分の物さえも、何故かなくなっていく。戸締りをしているのに、鞆を肌身離さず持っているのに、物はなくなっていく。落ちていった。そして誰かに拾われているのだ。下村の知らぬ間に。それが一番恐ろしかった。

その時の下村の欲求は、ただ拾いたいという一心だった。他人の物を拾いたいのだ。しかし落とし物を見つけたら、駅員と女性の眼差しを思い出した。下村は見ても見ぬふりをし

て素通りする。しかし、それでもなんと拾って自分のものにしたかった。会社でも、レストランでも、カフェでも、どこへ行っても人々が持つ物に目移りした。一目見ると、その物のことしか考えられなくなった。空腹のときの唾液のように、欲求が常に湧いて出てきた。下村は必至でそれを抑えていた。

しかし、一か月もするとその飢えも限界までやってきた。ある週の土曜日、雨に打たれ、人が溢れる車両の中で、下村は下に落ちていているハンカチを見つめていた。それは確かに誰かの物だ。しかし拾ってポケットにさえ入れれば、自分の物だ。けれどそれはできない。下村に憑いた恐れは消えることはなかった。

貰うのはどうだろう、と考えてみた。ハンカチを拾い、すぐそこにいる女性に話しかけるのだ。こんな風に。

「すみません、これ、落ちていたのですが……。ええ、やはりあなたのものでしたか。一つ、お尋ねしたいのですが、これを僕に譲ってもらえませんか？」想像したが、すぐに止した。そんなことをしてよこしてくれる人などいるはずもない。それから次にこう考えた。

タダがダメなら売ってもらおうのはどうだろう？俺がそれを買うのはどうだろう？

ハンカチから窓に目をやり、川を見た。雨粒は川に飲まれ区別がつかなくなっていく。窓は車内の熱気で曇っていき、何ものも反射しなくなり、下村の表情を見れる者も誰もいなくなった。

六

土曜の昼下がりが、東京は雨が降れども人は減らない。人混みはさざめき、波打っている。ビニール傘で漂う下村は手当たり次第に人に話しかけていた。

「すみません……。それ、僕に売ってもらえませんか？……。イエ……。怪しい者ではありませんせん、ほら、これぐらいならどうですか？……？」

誰にも相手にされずにただ一人、下村はさまよい続ける。ふとその時、すれ違いざまに誰かが肩をぶつけ、下村は倒れた。傘を取る前に下村は手を見て、腕時計がないことに気づいた。サツとぶつかったほうを見ると、老人が汚い笑みを浮かべながら、腕時計をヒラヒラと見せつけていた。下村は叫んだ。

「よこせ！俺のモノだぞ！」

下村は立ち上がろうとしては濡れたアスファルトに足を滑らせこけた。老人は狂気じみた笑い声をあげ、それから人混みの中に紛れ、飲み込まれていった。深く広い東京の街は老人を飲んだ。それから老人を見た者はいない。